

実践報告に学ぶ

大阪教育大学教授 木原 俊行

4つの学校の家庭学習指導等に関するレポートは、極めて示唆に富むものである。その特長を筆者なりに整理してみたい。まず、複数の学校の取り組みに共通する工夫を指摘し、その後、各学校の取り組みのすぐれた点について言及する。

1 複数の学校の取り組みに共通する工夫

次のような4点の家庭学習指導等の工夫は、複数の学校の取り組みに共通している。

①家庭学習の内容・方法の多様化

いずれの学校においても、家庭学習の内容・方法の多様性に関する理解がしっかりとしている。そして、それは、授業において育成を図る学力のとらえ方の刷新、つまり知識・理解に偏重した学力観からの脱却と連動している。

例えば、広島県三次市立三和小学校(以下、三和小学校)の実践では、同校は思考力・表現力の育成を研究主題に掲げているので、家庭学習課題にも、「任意単位を家で探してもってくる」「任意単位を使って自分の机の長さを測る」といった、創造的な活動が定められている。

また、東京都足立区立梅島小学校(以下、梅島小学校)では、食育の重要性にかんがみ、夏休みに、親子で弁当のメニューを考える、そのために親子が共同作業や対話を繰り返すといった、ユニークな取り組みが実施されている。

子どもの学力が総合的であるならば、家庭学習の内容、その質にも当然広がり生まれよう。実践校の報告はいずれも、それを再確認させてくれる。

②「教えて取り組ませる」家庭学習

4校ともに、子どもに対して、家庭学習の意義を説くだけでなく、それを進めるための方法をていねいに指導している。例えば、大阪教育大学附属平野中学校(以下、附属平野中学校)では、シラバス内に、「ノート活用法」といった側面から、家庭学習への取り組みの留意点が記されている。

また、栃木県栃木市立皆川中学校(以下、皆川中学校)では、教師たちが、テスト範囲表に「学

習のポイント」欄を設け、「身に付けてほしい学習内容」を具体的に子どもに示している。

③補充指導の充実

授業と家庭学習の接点として、複数の学校で、放課後等の補充指導が営まれている。そして、そのシステムが整備されている。例えば、三和小学校では、補充指導のための組織体制として、学校長が指導を担当するという戦略を用いている。また、皆川中学校では、補充指導の際に、子どもに、「学習予定表」等を提出させて、彼らの家庭学習の計画・実施を促している。

なお、補充指導の担当者については、4校からはレポートされなかったが、例えば保護者や地域住民、教員志望学生等のボランティアの活用等が普及しつつある地域も少なくない。

④家庭学習充実に向けた保護者との連携・協働—そのためのアプローチの工夫—

いずれの学校も、保護者に対して子どもの家庭学習のサポートを依頼している。そして、そのアプローチを工夫している。例えば、三和小学校では、PTA総会や地区懇談会において、家庭学習の支援を家庭に要請しているが、後者においては、子どもの学力実態に関するデータを提示し、サポートの必要性やリクエストの妥当性をアピールしている。

また、梅島小学校では、「我が家の子育てプラン」というリーフレットを作成して、家庭学習支援に関して、保護者を啓発している。同時に、リーフレットにはチェック表を載せて、保護者に子どもの生活を点検してもらっている。つまり、リーフレットに保護者の関わりを促す道具としての機能を持たせている(教師が保護者の協力の実態を把握するための道具ともなる)。

2 三和小学校の取り組みの特長

同校のレポートの図に顕著に示されるが、三和小学校では、授業改善と家庭学習の充実が連動している。特に、「任意単位を家で探す」や「広告を使って問題を自作する」といった、楽しく取り組んでいるうちに、自然と思考・表現を練り上げることになる、家庭学習課題の設定が見事である。

写真は、平成19年度の三和小学校1年生の算数における取り組みであるが、教室や家で100までの数を見つけて、それを絵に描いたり写真に撮ったりして、マス目を埋めようというプロジェクトである。



三和小学校1年生の算数学習のプロジェクト

3 梅島小学校の取り組みの特長

梅島小学校の取り組みでは、学習や生活についてのアンケート等の実施と活用が目立っている。まず、その回数である。同校の教師たちは、年間3回も、子どもを対象にして、学習や生活についてのアンケートを実施している。前述した「我が家の子育てプラン」であれば、保護者に、子どもの家庭生活を年間4回もチェックしてもらっている。

次いで、アンケート等の実施が次なる課題を明らかにする役割を果たしていることである。

同校の教師たちは、項目別の回答傾向、その時系列の変化等をきちんと分析して、子どもの学習や生活の実態把握に努め、それを踏まえて重点課題等を定めている。

さらに、そうした点検の営みが学力向上(同校の場合は、それを含む「夢プラン構想」)にきちんと位置づけられていることも秀逸であろう。換言すれば、梅島小学校では、学力調査や学習・生活実態調査が学力向上施策体系、そのマネジメントに資するものとなっている。

4 附属平野中学校の取り組みの特長

附属平野中学校の報告に登場する、「ノート活用」の重要性は、子どもの学力向上を図る上で、古くて新しい問題である。ノートの取り方の指導(板書を写すだけでなく、気づき等をノートには記すことなど)の大切さ、教師によるノートの点検(評価)の重要性は、これまでも指摘され

てきた。それは、今後も、変わることはあるまい。

附属平野中学校では、さらに、「ノート活用」を小中連携の装置や保護者との連携の絆のひとつとして認識している。そこに、こうした取り組みの今日的意義を確認できよう。

5 皆川中学校の取り組みの特長

まずは、同校のレポートで語られた「生徒と教職員の信頼関係や生徒間の交友関係が良好になって、学級活動等において実施している「学業と進路」に関する指導等が、より効果的に機能し、学習への意欲や意識の高まりにつながった」という点を確認しておきたい。授業改善も、家庭学習指導の充実も、子どもと教師の信頼関係等の上になり立つものであり、それがなければ、あるメソッドを導入しても実効性を持ち得ないという原則を、同校の報告は、再認識させてくれた。

また、「学習強調週間」を学芸委員会が企画運営すること、そのために「学習強調週間個人票」と「クラスチェック表」が活用されていることにも注目したい。すなわち、子ども自身の手で、学力向上のステップが刻まれていること、しかもこのケースではそれが子ども間で共同的に進められていることの意義である。教師からの押しつけではないので、子どもたちが取り組みに責任感を持つからだ。中学生らしい、学力向上のためのアプローチと言えよう。